

し切替。▽寛文一二年（一六七二）金木新田開発のためオノ神川、大川まで延長。新田開発一三七ヵ村成就。▽延宝三年（一六七五）高瀬村下小田川落合迄大川曲り八ヶ所穿替。▽宝永二年（一七〇五）三月岩木川大洪水。六月岩木川津波、岩木川大洪水。金木新開一八ヵ村開発成就。▽同三年（一七〇六）金木新田川口村（蔭田）より神原村まで築堤替。等々、岩木川の改修の状況により、小田川堀替えの設計も定められたものであろう。

昭和五十八年（一九八三）五月二十六日発生の日本海沖地震で、稲垣村流木巻地区（現小田川と旧十川の合流地点から成戸橋を渡った西側）は地震の影響で流砂現象があらわれ、約二十八町歩の田植した直後の水田は、旧岩木川の川筋を示し砂の噴出（かんぱう）一部陥没が神原の方向に現出したのである。（小田川参考図3 参照）

旧小田川が、現在の萩元排水路であったという理由の一つには、嘉瀬と金木の境界線であることで、現在も、嘉瀬の萩元地区と金木の菅原、浮州地区の境界になっている。

今でも五十歳以上ぐらいの年輩の人たちは、嘉瀬と金木間の道路（国道三三九号）を「カラジャケ」と言っていたことを記憶していると思う。「カラジャケ」とは「川境（かわさかい）」という意味なのである。

嘉瀬と金木の間の川コ。即ち小田川は嘉瀬と金木の境界線であったのである。

嘉瀬八幡宮およびその東側（俗称館コ）は蝦夷館（チャシ）のあったところ。金木高屋敷の対馬右衛門太郎と小田川・嘉瀬に館を守る八重・佐助とは不仲で、どちらが攻めるとしても、防備の線は川が第一線となるであろう。とすれば、現在の小田川の川筋では館の内側にあり戦略的には無意味である。

現在の小田川の川筋は、新田開発のためより多くの面積のかんがいを目的とした大改修の結果だと考えるのが妥当であろう。その後の小田川は数百年の間改修らしい改修もなく、蛇行した川筋、狭い川巾、堤防の低さで何時も洪水の危険にさらされ、雨三粒降ればいがるという状態が続いたが、戦後水利調整のための防災ダム建設の運動起り、紆余曲折の末、昭和四十六年六月着工された「小田川ダム」。小田川改修へ情熱を燃す多数の人々の努力により、昭和五十年（一九七五）から小規模河川改修事業として再開（昭和二十七年～三十年にかけて中小河川改修で下流から工事が行なわれたが、用地買収の問題で一時中断）二十年後の平成六年（一九九四）旧十川合流点から津軽鉄道橋（三六二六米）まで完了した。

小田川ダムの建設と小田川の改修により嘉瀬地区六〇〇町歩の水田は洪水の懸念もなくなり、水不足も昔ほどの心配は無くなり安心して水稲耕作が出来るようになった。

ーおわりー

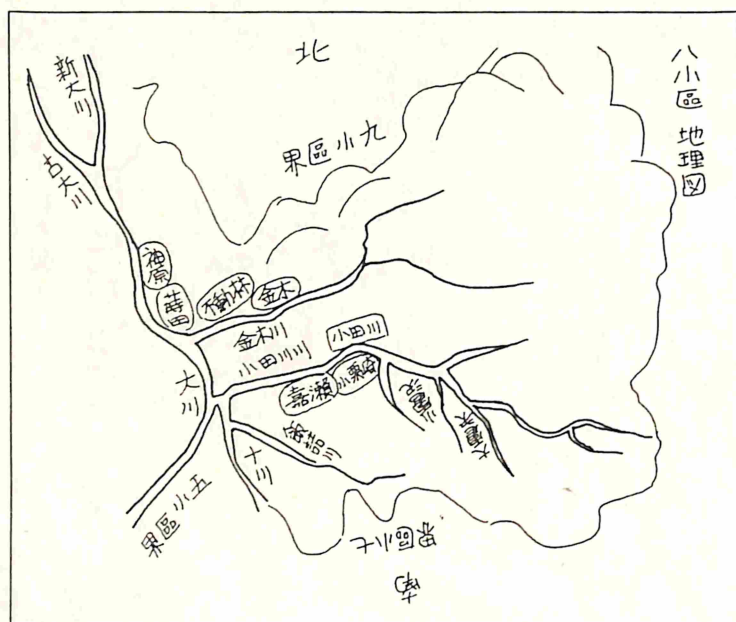
◎ この稿は、平成八年一月に発行された小田改修事業完成記念誌「嘉瀬と金木の間の川コ」に寄稿したものを一部改

め加筆したものです。

参考文献

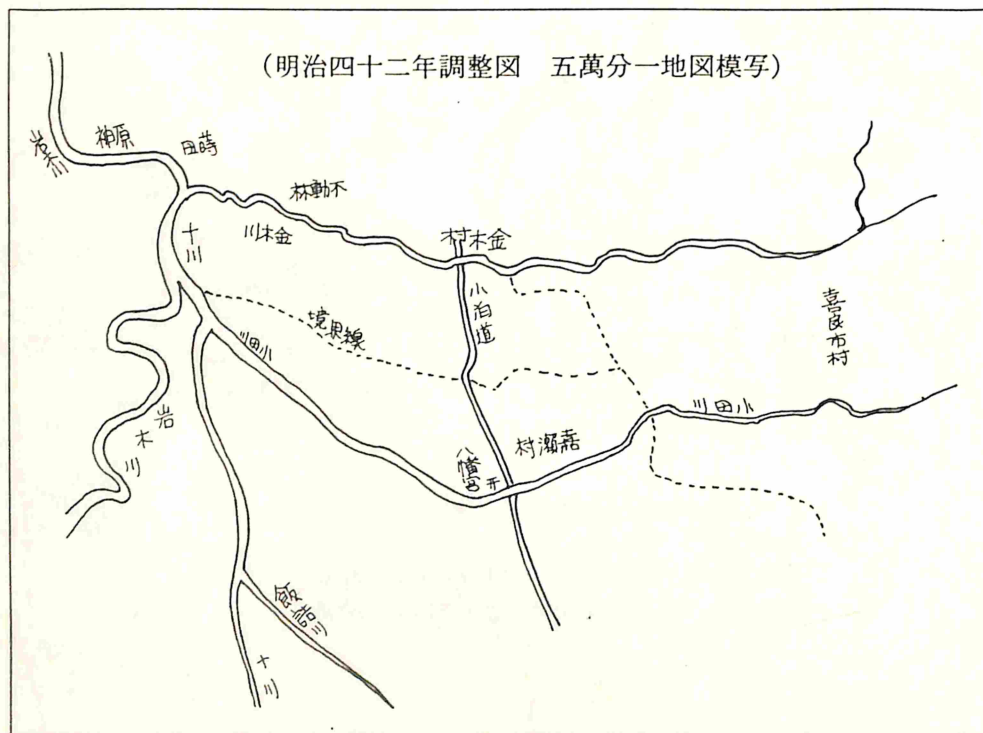
- 新撰陸奥国誌
- 岩木川物語
- 新釈青森県史
- 貞亨御検地水帳
- 津軽ケガジ物語

（小田川参考図1）

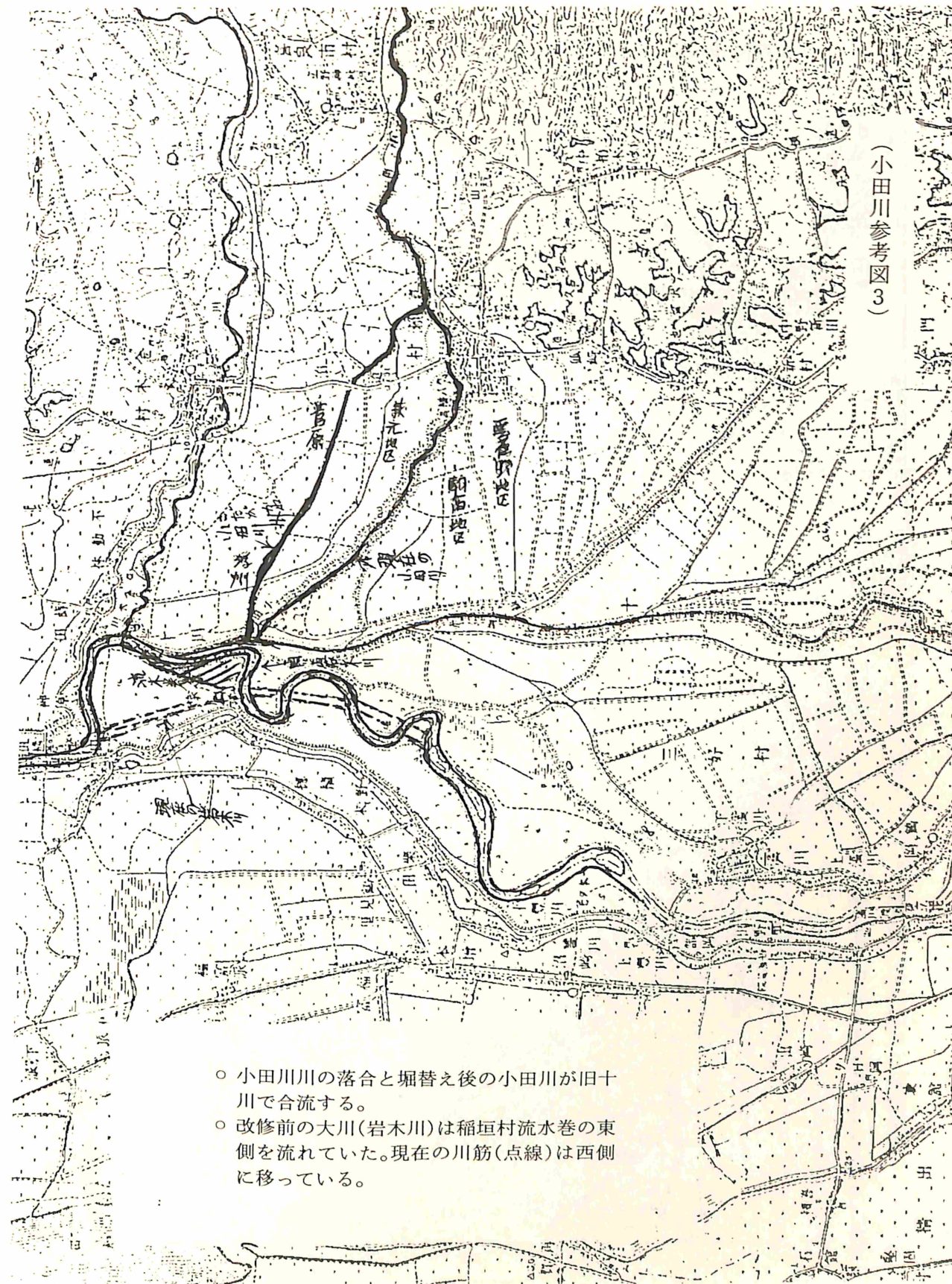
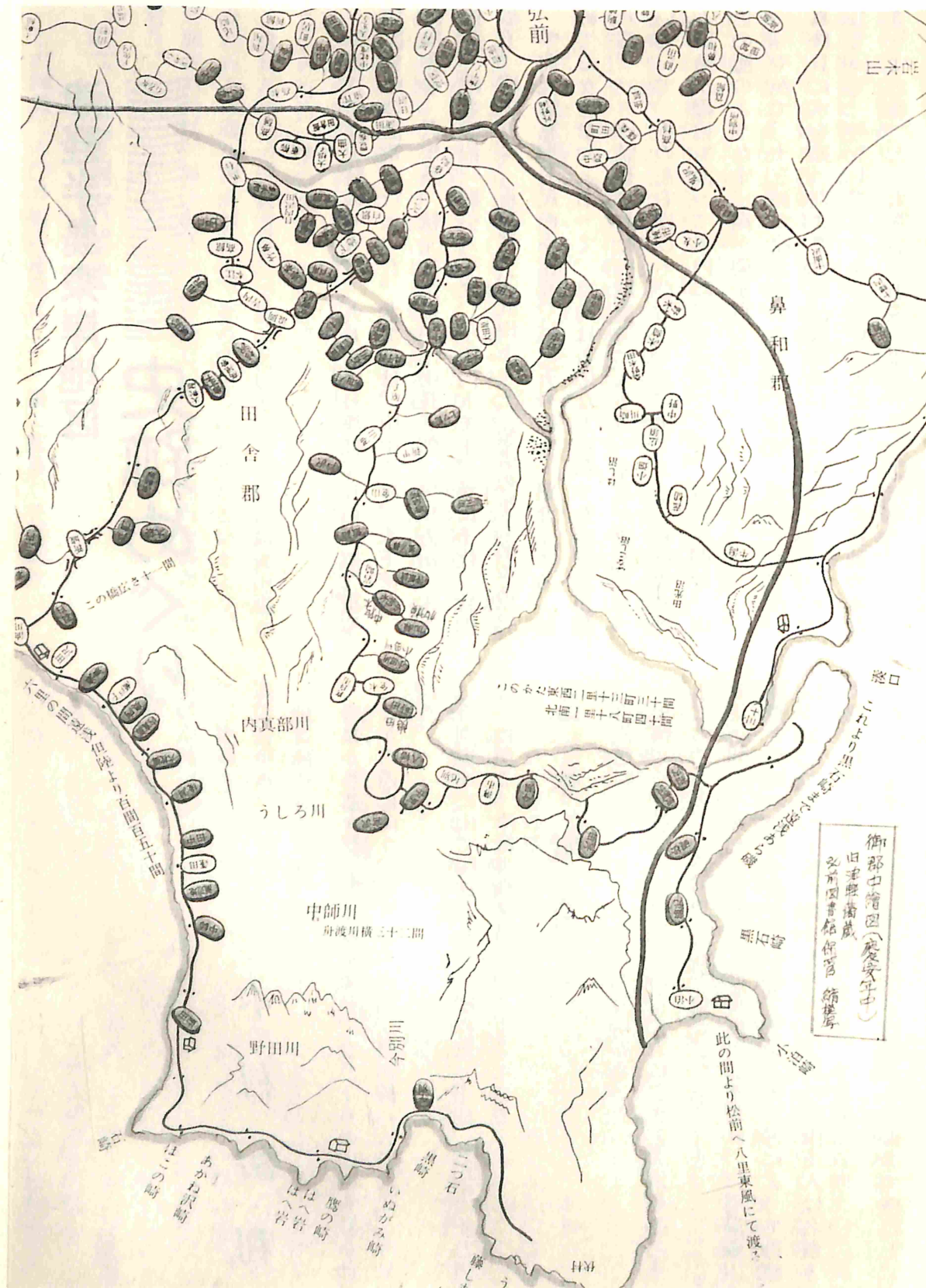


（新撰陸奥国誌巻第五十一より模写）

（小田川参考図2）



（明治四十二年調整図 五萬分一地図模写）



津軽半島東岸地区

史跡めぐり

木村 治利

平成八年度史跡めぐりは、九月十四日津軽半島の突端、東岸地区史跡の散策を行なった。参加者は、山中正津、木下清一、

沢田政孝、沢田薫、秋元惣之進、山中長三郎、原田万治、木下俊蔵、蝦名健治、櫛引八千代、小山内トモ子、桑田千代、竹内恭子、田中みよ、斎藤富子、沢田トミエ、筆者の十七名である。

午前九時嘉瀬公民館を出発、三三九号線を一路北上する、始めての女性参加とあって、車内は否応なしに和やかな空気が流れる。バスは舗装された広域農道に入る。一本道が真直につづいていて、その左右はひろびろとした田圃である。初秋の心地よい風が稲穂を渡って車内に入り込んでくる。視界が開け、灰色の海のような十三湖が姿を現した。

「やがて、十三湖が冷え冷えと、白く目前に展開する。浅い真珠貝に水を盛ったような気品はあるが、はかない、ひっそりしていて、そうしてなかなか広い、人に捨てられた孤独の水たまりである」と、太宰治の小説「津軽」の一説にある。

今泉から鰺ヶ沢、蟹田線に乗り、登り下りの山道を紆余曲折しながら西に向う、大平おおだから今別、蟹田線に入り北上、今別に向う。

今別海岸に出て国道二八〇号線に乗り平館、蟹田と走り再度大平に戻る。津軽半島東岸一周コースである。

一、本覚寺

今別町に入っすぐ右側に本覚寺があった。

史跡めぐり最初の目的地である。大仏さまと青銅塔婆のあるところである。本覚寺は始覚山還洞院と号する浄土宗の名刹。天正年間（一五七三～九二）の草創と伝えられ、出羽湯殿山の別当大日坊の衆徒や武蔵国の僧、安長上人などによって再建され、とくに五世住職の貞伝上人、十三世の愍栄上人は名僧として知られている。

貞伝上人は今別の出身、十四才の時より専修寺で修行し、本

覚寺の住職になったのは二十九才の時、以来漁業の振興や地域の開発に努めた。

そして各地を行脚し、多くの信者から慕われた。境内にある青銅塔婆は貞伝上人の菩提を弔うために信者の浄財により享保十二年（一七二七）に建立されたといわれる。本堂、庫裡など、いずれも名刹にふさわしい建物で、ユースホテルになっていて、宿泊を願うこともできる。塔婆は青銅製のもので、全国でも珍しく、県の重要文化財に指定されている。

二、舍利石（仏骨の意）

本覚寺から国道二八〇号線を東へ行くと鑄釜崎いがまざきがあり、坂を下ると前方に高野崎たかのさきが見えてくる。この二つの岬の間の海岸一帯が舍利浜、アズキほどの白い光沢の石、舍利石がとれることで知られている。

霰月はろづきの集落は舍利浜に沿って、密集している。昔は「両翼突」といい附近一帯の地名であった。

舍利石は今では貴重な石で得がたいという。釈迦如来出現と舍利石とは深い関係があり、その名がつけられたといえよう、時間があれば、海辺をゆっくり探し、仏縁で舍利石を得たいと思う。

三、海雲洞釈迦堂

この国道二八〇号線の道筋に二十一番（同番）の霊場が二ヶ

所あってなれない巡礼はとまどっているといわれる。

第二〇番、霊場は高野山観音堂で、本覚寺から約二〇メートルの近くにあった。高野山観音から約七キロ行くと海雲洞釈迦堂、そしてさらに六キロに鬼泊岩屋観音と続く。車から津軽海峡をへだてて北海道がよく眺められた。吉田松陰文学碑も海辺にたたずんでいた。

海雲洞釈迦堂は、集落のやや奥まったところにあり、御堂の裏手には十二米余りの飛瀑がある。昭和四十七年に建てられた御堂は部落の公民館といった感じ。通稱滝見観音、海雲洞といわれるが、その草創は天長年間と伝えられ、後の元和年間（一六一五～二四）に再建、堂内には舍利浜よりあらわれた釈迦如来をご本尊とし、かつての鬼泊のご本尊であった聖観世音をも安置している。

四、霰月海岸、高野崎

海雲洞からすぐ高野崎だ、ここで休憩となる。無料休憩所や展望台があり、ひろびろとした草地は、キャンプ場になっていて、絶好の行楽地であった。海辺は遙か千尋の谷底にあり、吹上げる風は強かったが、絶景である。この地は断崖絶壁の上にあり、崖の淵に高木恭造文学碑が、じつと強風に耐えていた。

絶壁の下は海岸は、大小の岩が連なり、その先端に潮騒橋、渚橋がかすかに見え、灯台附近には、材木状の岩が露出し、夜の沖合はイカ釣り船の漁火が、ロマンチックといわれる。

津軽半島 褰月村で

詩 高 木 恭 造
板 大 川 恭 央

この村サ一度だて、陽コあだたごとあるがジャ
家の土台コア みんな潮虫ネ 噛れでまてナ
後ア塞がた高ゲ 山ネかて潰されで
海サのめくるえンたでバナ

見ナガ

あの向の陽コあだてる 松前の山コあの

綺麗だだ光コア 一度だて俺等の村サ

あだたことアあるがジャ みんな貧ボ臭せくてナ

生臭せ体コしてナ 若者等アみんな他処サ逃げでまて

頭サ若布コ生えだえンた 爺嬬ばりウヂャウヂャてナ

あああの沖バ跳る 海豚だえンた悴等ア

何処サ行たやだバ

路傍ネ捨られでらのア みんな昔の貝殻だネ

魚の骨コア腐たて 一本の樹コネだて なるやだナ

朝も昼も、たんだ濃霧ばかりかがて

晩ネなれば、沖で亡者 泣いでセ

五、赤根沢の赤石

国道二八〇号線沿いに大きな赤い岩があった。藩政時代この赤根地区は、朱色塗料の原料となる赤土の産地として知られ、日光東照宮や岩木山神社の大堂、山門などの修復に用いられた。この岩は「赤根沢の赤岩」として県の天然記念物に指定されている。

六、鬼泊岩屋観音

奥平部地区の東北端、網不知の鬼泊岩屋観音に到着した。トンネルを二つくぐると、左手海岸に巨岩があり、その小さな洞窟に観音堂がある。

時折荒波が打寄せ、御堂は波しぶきにかくれる。

緑起には、正保四年（一六四七）にご本尊の聖観音を安置したのに始まるという。「寛延順礼記」に「砂が森、奥平部村、網不知村ゆきて鬼泊とて、岩屋に観音堂あり、三尺四面、御仏体、棟礼ともになし、津軽かいほう、外ヶ浜の舍利堂と申すは、この所にあり、また海の中に岩あり、船にて参詣する所なり」と、江戸時代の頃は岩屋が海中にあったため船で参拝したことが知られる。

御堂が荒廃した享保年間（一七一六～三六）には、貞伝上人が、ご本尊を本覚寺へ仮移遷している。その後ご本尊なき霊場となって、明治の廃仏毀釈で廃堂となり、明治の中頃復活し、

八、不老不死温泉

予定到着時刻（正午）より少し遅れて到着した、クジによる座席指定券を受け、お膳の前に坐ると忽ち空腹を覚える。さすが漁港だけに豪華版である。死ぬまでは、老いない、死なない温泉に入ると、会場は大いに盛上る。三時迄の懇談時間も不足気味である、又を約束して温泉に別れを告げる。小雨ぱらつくなか、最後の散策地観瀾山に向う。

九、松前街道

江戸時代、松前藩が参勤交代路として利用した松前街道は、樹齢二九〇年を数える黒松の並木が連なり、下北半島、北海道がすぐそこに望めるところだ。

十、観瀾山散策

観瀾山は、海拔六〇メートルほどの小高い丘である。もとはアイヌのチャシ（砦）であったといわれる。ここからは、波静かな陸奥湾をはじめ、下北半島、夏泊半島、八甲田連峰や北海道も望めるのだが、あいにくの小雨で、海は濃霧で沖は見えなかった。

観瀾山は、もとは鷲尾山と称されたが、大正十二年（一九二三）久邇宮邦久王がこの地を訪れた際その名を賜った。

山頂には太宰治の文学碑があった。昭和十九年五月、太宰治

二十一番霊場としていまも巡礼は、礼を打ちつづけているのである。

幾百枚と連なる納札の中に、銀紙、金紙が数枚見受けられた。

納札は、一～二回目―白紙。三回目―板札、四回目―黄紙、五回目―青紙、六回目―赤紙、七～九回目―銀紙、十回目―金紙（安産守札）といわれる。袈婆、念珠、白衣、ずた袋、手甲、脚絆、白地足袋の巡礼衣裳を着け、納経帖、納経軸を持った巡礼者が、何度もお参りしている姿が、波間に浮んで離れなかった。

七、平館灯台と平館砲台跡

全国的にも例のない道路添いの白亜の灯台があった。松の緑にくつきりとはえる灯台は、明治三二年（一八九九）から点灯している。七五〇濁光。灯台のすぐ南に砲台（台場）跡地がある。長い鎖国の夢をやぶる黒船がしきりに日本近海に出没するころ、幕府は北辺の警備を東北各藩にゆだね、津軽藩でも沿岸各地に砲台（台場）を設置した。老松の林のなか、四方土堀に囲まれた平館の台場は、仮屋及び陣屋、土蔵とともに一八九九（嘉永二）年につくられた。台場設置前一八四七（弘化四）年オランダ船一隻が碇泊、一八五五（安政二）年にはイギリス船が上陸した。

が「津軽」取材のため、ここを訪れ、この町の旧友中村貞次郎氏をたずね、この山で花見の宴をひらいた。彼は「津軽」に蟹田町の印象を、「静かに、淡く咲いている」等と語っている。これを記念して、昭和三十一年文学碑が建てられた。碑石は平館の宇田海岸にあった自然石、井伏鱒二の選文した「かれは人をよろこばせるのが何より好きであった」（正義と微笑）ということばが、佐藤春夫氏の筆跡で刻まれている。

地元の川柳作家杉野十佐一の句碑などあり、落ち着いた散歩路となっている。

参考文献

津軽三十三ヶ所観音霊場めぐり

青森県の丁史散歩

史跡めぐりに参加して

小山内 トモ子

この度は史跡巡りの旅へ私達六人を参加させていただき、本当にありがとうございました。

しばしのバス旅、私達は年がいもなく騒ぎはしゃいでいました。

みなさんとも知り合いになり、あこがれの櫛引八千代さんとも知り合いになられたことは、何よりうれしく存じています。いろいろと、私たちなりに、参考になり、勉強になりました。又の企画にも、ぜひ参加させていただきたいと思っています。どうぞこれからも、よろしく願います。

友と来て 史跡めぐりも 又楽し

竹内 恭子

腰痛も 史跡めぐりで わすれさり

秋ゆかば 史跡めぐりの たのしさよ

老人の 若き友との 語り合い

桑田 千代

老人と 史跡めぐりて 風すずし



史跡めぐりの一行



本覚寺 聖観世音菩薩



津軽半島 寝月村の高木恭造氏の詩碑



本覚寺の青銅塔婆

嘉瀬山叙事譜

山中 長三郎

ふるさとに向ひて

言ふことなし

ふるさとの山はありがたきかな

石川 啄木

第一章

昭和三十六年十一月より平成八年まで一年も欠かしことなく出稼ぎに行きました。夏と冬を通しては昭和五十五年の凶作、私の田は一俵の米の収穫も無く、それから十三年間続く、その他は冬期間だけ、大正生れの労働者は今年は私の居る会社の現場も私の他に居りません。

この原稿は出稼先、三重県鈴鹿市中部重機工業(株)宿舍鈴青荘の床に腹這になつて首を出しながら書きます。何日かかってできるか見通しがありません。ふるさとを離れて想う山はと、問はれると津軽衆は誰れでも迷うことなく岩木さんと答えましょ

う。

しかし、夢見る山はと問はれると私は小学校時代に遊び巡つた嘉瀬観音様とその近くの山々である。小学時代のスキー大会のミカン拾い、遠足時のアケビ・ぶどうを級友と探した思い出。当時は特別の貴重品であるカメラを首に下げ、口髪を生して自慢の手造りパイプをくわえ又パイプ造りの材料「トズナの根元」探しに余念のない村の富豪家の先生も居った。

又小学校三年生以上の生徒と先生の約四百人ほどで観音様近辺の山で兎狩りもある。生徒達は手を繋ぎ大きな、大きな輪になって兎のかくれていそうな藪コを何ヶ所も囲む、輪の中には高等小学校二年生と先生が一メートル二メートルほどの棒を持って藪コを叩きあるく、兎は驚いて藪コからおどり出て走り出す。それを目掛けて先生も生徒も殴りかかります。兎は猛スピードで走り廻り輪の外に逃れようと突進して輪の近くまでくると、輪の生徒が一斉に喊声を上げて追い返す。

棒を持った生徒も先生も又それを追いつながら殴りかかる。輪の生徒は先生ケバレ、頑張れ、と声援を送る。